

幽玄

題字 高秀秀信

横浜能楽連盟

会報 No. 58

令和元年9月30日

時代の節目



会長 馬場 洋一

考えてみました。

令和になり約半年が過ぎましたが、昭和から平成に変わった時とは別の意味で、時代の節目の胎動を感じます。

来年夏にはいよいよ「東京2020オリンピック・パラリンピック」が開催されます。チケットの抽選結果に一喜一憂するなど「お・も・て・な・し」が流行語になった6年前の開催決定が大昔に思えるほど、目前に迫りました。今大会のビジョンとして「全員が自己ベスト」「多様性と調和」「未来への継承」の3つの基本コンセプトが掲げられています。これを見て、まさに横浜能楽連盟にも当てはまると思わず膝を打ち、私なりに

①全員が自己ベスト「すべてのアスリートが最高のパフォーマンスを発揮し、自己ベストを記録できる大会を実現」……もちろんオリンピックと能楽連盟では規模が全く違いますが、連盟の大会は輪番制で、各流派が運営幹事を務めていただくことでスムーズな運営ができています。反省点があれば知恵を持ち寄り解決し、それを次の幹事が引き継ぎ、積み重ね、より良い大会を目指します。その結果「五流大会」「つどい」という2つの大会で、出演者全員が「最高のパフォーマンス」と「自己ベスト」を発揮できる場が作られているのです。

②多様性と調和「人種（略）などあらゆる面での違いを肯定し自然に受け入れ、互いに認め合うことで社会は進歩する」……連盟に置き換えれば「違い」とは能楽との関わり方でしょうか。

動機は「幼い時から親に言われて」「大学のサークルで」「職場のクラブに上司に力づくで」「観能して魅入られて」「定年で仲間づくり」など様々です。師範級から始めたばかりの方まで、経験も違います。稽古の仕方でも目指す所も上達の手続きも人それぞれで、それぞれ「多様性」に富んでいます。会員が相互に違いを認め合うことで能楽連盟としての「調和」が成立していると思います。

③未来への継承……これは、横浜能楽連盟の設立目的そのものです。能楽は600年にわたって能楽師・権力者・市井の人々によって伝えられてきた芸能であり文化です。これを素人なりに未来へ伝えていこうというのが我々連盟の目的なのです。

横浜能楽堂の開館という大願が成就してから、連盟の使命は能楽堂の活用、すなわち大会の運営及び活性化に軸足を置くようになってきました。それから20年を超える歳月が流れ、現在は、会員間の意思疎通、交流の活性化、運営の透明性が求められる時代になっていると思います。理事会においてもそう実感するような議論が増え、新しい時代の夜明けにふさわしい進化の兆しが見えるようになりました。これからも、能楽愛好者が誰でも自信を持って参加して「自己ベスト」を達成でき、「多様性と調和」が真に実現できる連盟として、「未来への継承」を目指したいと思っています。

連盟報告（平成30年度）

企画事業担当 青山 圭佑

一、定期総会

平成30年4月23日（月）、横浜能楽堂2階において開催されました。出席会員及び委任状の総数により総会は成立し、29年度の活動報告・会計報告が行われ、30年度の活動計画・予算案が提示説明されて、共に承認されました。また、役員の改選が行われ、馬場会長及び副会長2名（青山氏・倉藤氏）の再選が承認されました。

二、大会の開催

連盟主催の「第34回横浜五流能楽大会」は、平成30年10月13日（土）、横浜市文化観光局の共催及び横浜能楽堂の後援により、担当流派金春流にて開催されました（詳細は57号にて報告）。また「第22回五流交流のつどい」は、31年3月9日（土）、担当流派観世流にて開催されました（詳細は以下に報告）。なお、両大会とも「横浜能楽連盟創立70周年記念」と銘打った開催で、中でも面友会・面の会による能面の展示は大変好評を得ております。

三、横浜能

横浜能楽堂との共催「第66回

横浜能」は、平成30年6月2日（土）開催されました。能「砧」（金春流・桜間金記）狂言「佐渡狐」（和泉流・野村万蔵）。チケットは完売でした。

四、会報等について

「幽玄」は第56号（平成30年9月30日付）と第57号（平成31年3月31日付）を発行しました。また、大会ごとにPRのチラシを作成し、市の各地区センター等に配布しています。

五、会員の動向

会員の高齢化により、会員数の減少が続いております。個人会員数は平成29年度415名、30年度388名、令和元年度366名です。団体会員も29年度43、30年度42、令和元年度は41となっております。

「第22回五流交流のつどい」報告

観世流 青山 圭佑

平成31年3月9日（土）、横浜能楽連盟創立70周年記念として、横浜市観光文化局の共催・横浜能楽堂の後援により横浜能楽堂にて開催されました。

出演内容は、素謡14番、連吟5番、仕舞20番、出演者は延べ271名でした。国学院大学観世会による学生たちの仕舞3番も行われ、若い人達の気合の入った舞と地謡で、観客の皆様も若さの躍動感が感じられたと思います。また、学生達の上達ぶ

りが見てとれました。

「面の会」の展示も行われ、評判も上々のようでした。

なお、今回は本舞台への出入りを、入場は切戸口より、退場は橋掛りから鏡の間へと変更して実施しました。前回までは入退場時に切戸口が混雑し（高見台10脚と見台が場所を占領していたため）、また見台を持って切戸口から退場するのは段差もあって危険も感じられ、そのため進行の遅れが生じてしまいましたので、テスト的に導入しました。今回退場を橋掛り経由としたことは、切戸口の混雑解消と進行時間の遅れ防止に役立ったと感じました。出演の方々にも好評だったようです。

謡を始めて十二年

観世流 町田 守康

横浜能楽堂で毎年「横浜かもん山能」が行われています。以前、西区区民にチケットが区役所で先行販売されていることを知り、行ってみました。その時には解説があり、謡全文を文字に起こした印刷物が渡されて、初めての私でも理解できる丁寧な対応でした。そして観世銕之

丞さんの舞台を数回拝見しました。いずれも脇正面だったので、地謡の朗々とした一糸乱れぬ謡が正面から聞こえ、とても感動し魅力を感じていました。

そうした頃、元の職場の先輩から観岡会に誘われましたので二つ返事で応じ、入門させていただきました。稽古は観世流初心謡本上「鶴亀」から始まり、先生が謡うのを謡本を見ながら聞いて謡っていく、カセットテープに収録し家で復習する、次に進む所をよく読んで予習していく、という方法でした。入門してしばらくは毎週の稽古だったので、なかなか大変でした。2曲目「橋弁慶」が修了した頃、5月に観岡会のおさらい会が催されることになり、「橋弁慶」のシテをやりたいと言われました。未だ習いたてで不安でしたが、先生のアドバイスで豪快で子細な弁慶の役づくりに励み、苦勞しましたが横浜能楽堂の本舞台でプロの先生方の地謡に支えられて無事に謡うことができました。何故習いたてなのにこんなに早く、と思いましたが、今思えば、「謡は芝居をすること」ということを一気に体得させるためだったのだと得心。なにせ、小学校の時の学芸会の経験しかなかったのだから。

そうして2年目には初心謡本上・中・下の15曲の稽古が修了

し、先生から「さあ、これからやりたい曲が習えるよ」と言われました。それから叱咤激励されつつ13年が経ち、65曲を稽古してきました。稽古の時はギクシャクして訳もわからずですが、家で復習していると名文はともかく名調子に気持ち良くなります。クリ・サシ以降終盤は特にです。謡の魅力でしょうか。まだまだ読み込みが浅いため読み違いが多く、しょっちゅう指摘されています。

全部で200曲と聞きますがまだまだ3分の1、稽古しきれるか見通しはありませんが、1曲1曲積み重ねて行こうと思っています。観岡会の暮れの謡納め会、新年合同謡初め、横浜五流の会、研修会やおさらい会等も良い勉強や経験になります。

健康長寿とお能

観世流梅若会 内倉 和雄

お能を楽しんでいる人の中には、ご高齢でも心身ともに健康な方を多く見かけます。私共の会の堀内万紗子先生も、卒寿を迎えられましたがお元気で、謡や仕舞の稽古をされています。

世間では「お能の関係者の平均年齢は高い」との声をよく耳にします。また「若い人が少ない、増えない」との言い回しも耳にします。関係者の年齢比率に目を向けると、社会のそれと比べて高齢者優位になっていま

すが、この高齢者優位にはいくつかの要因があると思います。

そこで、お能が若さを保ち健康を維持することに寄与している、との視点で考えてみます。

お能には謡と舞の要素がありますが、まず謡は、「帯を締め」「正座をして」謡います。正座することでお尻が足の上に収まり、頭部から背骨を貫く体の線がしっかりと、自然に姿勢がよくなります。この姿勢は背筋・腹筋などの筋力維持、腰痛予防に効果があると言われています。加えて、深く息を吸い込み、そして腹から声を出す発声法が、肺や他の臓器の活性化に有効であり、ストレス低減にも寄与していると言われます。一方の仕舞は、まっすぐな姿勢、すり足に代表されるゆつくりとして安定した動きをします。これは全身の筋力維持・増強に有効で、特に大腰筋など体の深層筋（インナーマッスル）を活性化させると言われています。

更に、歳を重ねると、小言は言うが言われることは少なくなりますが、お稽古で先生から叱られたり、直されたりすることが、精神的な若さを保つのに役立つように感じます。これら多くの要因が身心を活動的にし、健康体の維持に寄与しているのではないのでしょうか。

五流能楽大会などで、しゃんとした姿勢を保ち、朗々と謡う

長老格の人に巡り合うことも少なくありません。皆様とご一緒に「健康長寿とお能」を実践し、お能の発展と更なる普及に貢献できればと願っています。

ITとAIに期待

宝生流 井上 豊年

能楽との出会いは大学時代、教養の1年が無事終わろうとしていた学食で、気の良さそうな部員2人が広げていた宝生流の一番本を覗き見たのが入部のきっかけだったと記憶しています。卒業後は長いブランクがありました。人生の折り返し地点を過ぎた50歳でまず謡から、7年後には仕舞も再開しました。今風に言えば、終活の目覚めだったのかもしれませんが。

それから15年、世間ではITにAI、その技術進歩は加速度的で、往年のブラウン管テレビのように厚く重かったパソコンのディスプレイが、今やウェアラブルに。その勢いにあやかっ

て、音域の違う男女が無理なく謡曲を同吟できるデバイスなどというものができないものかと、常々期待しています。

私が所属している横浜宝生流連合会の月例会は、謡4番を全曲やるのですが、数年前からその内1番は女性主体の曲を設けています。たとえばこれにワキのお役で男性が手を挙げてても却下されないとは思いますが、地

の部分が苦しいのでやはり遠慮してしまいます。私もその一人です。これは男性目線ですので、見方を変えると女性は1曲しか気持ちよく声をあげて楽しめないのです。男性の先生方は女性のお弟子さんにも声の高さを合わせますが、私は音域が狭いのが悩みで、曲によっては高音と低音両方で苦労しています（不思議なこと、カラオケでは女性歌手の曲もキーを変えずに歌えます）。

謡は洋楽と違い絶対音ではないので、アドリブの得意なジャズミュージシャンでも、混声合唱のようにハモるのは至難の業でしょう。じゃあどうするのか。これまで不可能を可能にしたのがITやAI。でも能楽はまだマイナーな領域だから技術者も企業も手を出していない。この世界にもMcLooが浸透してくれば、男女の音域を調和する機能が実用化するに違いなし。老若男女みんな一緒に無理なく楽しめるようにきつとなる。ITやAIが何とかしてくれるのを待ちながら、終活のThe endギリギリまで元気で謡い続けたいものです。

能との出会い

喜多流 牧田 紀子

謡と仕舞をお稽古するようになって、もう20年以上になりました。

能に出会う前は歌舞伎や文楽に夢中で、休日は劇場に通いつめ、関連の講演会や勉強会にも参加していました。その会でしばしば話題に上ったのが能でした。歌舞伎・文楽・能は、同じ題材であっても表現や扱いが異なり、その差異を知ることにより深くそれぞれの作品を鑑賞できるだろうと感じました。

そこで、それまで敷居が高いと避けてきた能をとにかくも観てみよう、「熊野」の公演に出かけたのですが、詞章が聞き取れず、難解の一言に尽きました。文楽では床本の小冊子が公演パンフレットと共に配布され一言一句聞き逃すことはありませんが、能には事前の勉強が必須で、詞章を覚えていないと舞台を丸ごと楽しめないのではなにかと感じました。

そんな折、横浜能楽堂で「みんな能謡『高砂』」という催しがあることを知り、参加しました。先生一人に生徒は能楽堂の見所の数百人という画期的な試みで、一人で参加しても大勢の仲間と気軽に謡を体験できました。このとき指導してくださった喜多流の出雲康雅先生に引き続きお稽古をお願いし、以来現在まで続けています。

謡の詞章を覚えることはいまだにできていませんし、学んでも疑問があとからあとから湧いてきますが、すっかり能にハマ

っています。この会報を手にとられた方で、能をまだ観たことがない方や、能が難しいと感じておられる方、是非お稽古されることをお勧めします。

素人のつぶやき（つづき）

金剛流 大嶋 一晃

A・連盟は、発足後七十余、この古典芸能を地道に支えてきましたのは、やはり県や市行政に関わる方々でしょうか？

C・昭和43年、市議副議長長の一役を経験された庄司清夫会長の時「横浜能楽連盟」に改名され、16回の横浜能の実績と文化復興に貢献した功績により団体として横浜文化賞を授与されました。

B・名称から謡曲（素謡・連吟等）が外れ演能・狂言だけとなりました。

C・昭和59年に、県政市政に関わった新堀豊彦氏が会長に就かれ、32回横浜能の円滑運営・採算性の改善のため、横浜能への市の補助金の増額交渉や、横浜能楽堂の建設促進に努力されました。

B・平成3年には染井能舞台の解体古材の入手により能楽堂建設・経営主体となる第三セクター「横浜市文化振興財団」が発足し平成4年には1億円の設計調査費の予算が付き、同5年には横銀・有隣堂・崎陽軒等々からの募金も1億円に達しました。

C・平成5年8月に能楽堂が完成し、第44回横浜能以降は、県立音楽堂・関内ホール等の仮設舞台から観客数486席の本格的な能舞台に移行しました。

A・演能の機会は整備されましたが、観賞する観客を集めることも大切ではありませんか？

B・能の愛好者の基盤は、謡曲や仕舞を習う趣味人の数によるので、連盟では、素人が能楽堂の本舞台で謡ったり舞ったり出来ることを目的に、五流合同謡曲大会が昭和62年に関内ホールで再開され、現在の「五流交流のつどい」と「横浜五流能楽大会」に繋がります。

C・この再開時に横浜市内で金剛流のグループ（IHI横浜謡曲部）が名乗り出て連盟に加盟し、五流大会として大きな成果を上げました。

A・今年の第67回横浜能は金剛流の「墨田川」と狂言「箕被」で、豊嶋彌左衛門さん（80）と野村万作さん（88）の大ベテランが演じられ、ワキ方も素人に解りやすい文言が使われて人情味溢れる演技で満席の観客の心を奪い盛況でした。

B・今後能の愛好者を、どう増やしていくかが課題でしょう。

A・合理性を追求する現代社会において、いかにも日本人的な人情味という非合理性の感情を担う能楽・古典芸能を、小中高の教育の場でも伝えていくこと

を、行政に期待します。

（出典「お能と横浜」横浜能楽連盟）

青いケシと能

金春流 松永 秀和

学生時代に少し能を齧っていたが、本格的に稽古を始めたのは17年前、会社を早期退職して起業し、少し時間に余裕ができた頃から。順調に稽古を積み「経政」「杜若」「葵上」と能も3番演じさせていただいた。

能を習い始めた頃、仕事場へは自転車通っていたが、その道すがら四季ごとに様々な花と出会う。「この花何だろう」とデジカメで撮り図鑑で名を調べているうち、花に興味を持つようになった。ひっそりと、また踏まれてもしどく咲く野の花は自分の分身のように思えた。花への関心は年々強くなり、植物園などを訪ねてカメラに収めるようになった。還暦を期に仕事を減らし、野の花を求めて山に登り始める。初めて登った八ヶ岳で見た高山植物の可憐さが情熱に火をつけ、翌年から精力的に山に向かう。北ア縦走を皮切りに、北岳や南アルプス縦走、尾瀬など花の多い山々を訪ねる。この年だけでも13座の百名山の頂に立った。その後も北は礼文島から南は屋久島まで、全国の山々を巡り、花々を観た。百名山も60座を超えた頃から「日本の山の花は見てしまった」

と思うようになった。どの山でも似たような花に出会うからだ。そんな時、写真集でヒマヤの青いケシを見る。氷雪をバツクに凜と咲く青いケシ。衝撃だった。世界にはこんな花もあるのかと。中国四川省への探索旅行に参加して、初めて実物の青いケシと出会って虜となり翌年からインドを皮切りに雲南

省・ブータン・ネパール・チベットを訪ね、数多くの青いケシと出会った。青いケシは、その和名に似合わず様々の色がある。青はもちろん、赤・白・黄色・黒に近い濃紫色まで。花も数cmから25cmくらいまであり、標高4千mを超す高地では比類のない大きさだ。そんな花が風でたおやかに

揺れている。まるでシテが舞台の上で舞っているようだ。世阿弥のいう「花」とはこのような姿かと思つた。これからも「春は野に花を求め、夏は山に花を探し、秋は溪谷に紅を愛で、冬は舞台に花を咲かす」日々を送りたいと考えている。

能楽堂だより

令和元年10月～2年3月の公演案内

令和元年10月以降の横浜能楽堂の公演予定は、次の通りです。このほか、毎月第2日曜日に普及公演「横浜狂言堂」を開催いたします。

企画公演「東次郎 家伝十二番」(全12回)

第7回 10月26日(土) 午後2時開演

狂言「鍋八撥」(大蔵流) 山本則孝

狂言「東西迷」(大蔵流) 山本東次郎

第8回 11月30日(土) 午後2時開演

狂言「三本の柱」(大蔵流) 山本泰太郎

狂言「八尾」(大蔵流) 山本東次郎

第9回 12月14日(土) 午後2時開演

狂言「木六駄」(大蔵流) 山本凜太郎

狂言「米市」(大蔵流) 山本東次郎

第10回 1月13日(月・祝) 午後2時開演

狂言「麻生」(大蔵流) 山本東次郎

狂言「庵梅」(大蔵流) 山本泰太郎

第11回 2月8日(土) 午後2時開演

狂言「栗田口」(大蔵流) 山本東次郎

狂言「節分」(大蔵流) 山本凜太郎

第12回 3月1日(日) 午後2時開演

狂言「鱸包丁」(大蔵流) 山本東次郎

狂言「若菜」(大蔵流) 山本則重

S席四千元/A席三千元/B席二千五百円

チケット発売中

特別公演「蠟燭能」

◎連盟後援行事

「第39回横浜能面展」(ア)会) 10月24日(木)～29日(火) 横浜馬車道ア(下ギャラリー)「第36回かもんやま能」観世流「三輪」他・11月24日(日) 午後2時より・横浜能楽堂「第39回面友会能面展」令和2年3月下旬予定・横浜馬車道アートギャラリー

10月14日(月・祝) 午後4時開演
狂言「空腕」(和泉流) 野村萬能「娘捨」(観世流) 浅見真州

S席九千元/A席八千元/B席七千元

チケット発売中

普及公演「眠くならず楽しめる能の名曲」

12月22日(日) 午後2時開演

狂言「業平餅」(和泉流) 井上松次郎

能「羽衣」(宝生流) 和久莊太郎

S席四千元/A席三千五百円/B席三千元

チケット発売中

横浜能楽堂・神奈川県立歴史博物館提携企画公演

「井伊直弼が作った能と狂言」

2年2月29日(土) 午後2時開演

狂言「鬼が宿」(大蔵流) 茂山千作

能「筑摩江」(喜多流) 出雲康雅

S席六千元/A席五千元/B席四千元

チケット発売：11月9日(土) 正午から

普及公演「バリアフリー能」

2年3月20日(金・祝) 午後2時開演

狂言「清水」(和泉流) 野村又三郎

能「橋弁慶」(金春流) 高橋忍

S席四千元/A席三千五百円/B席三千元

介助者1名まで無料

チケット発売：2年1月18日(土) 正午から

頼政と忠綱を憶う

下懸宝生流 金子 光子

「かくて平家の大勢。橋は引いたり水は高し。さすが難所の大河なれば。さうなう渡すべきようもなかつし所に。田原の又太郎忠綱と名乗って。宇治川の先陣我なりと。」

令和元年7月のある日。藤田先生の朗々たる声がお稽古の場に響き渡ります。臨場感いっぱいの先生の声を聴いていますと、いつの間にか八百年以上も昔の源平合戦の様子が私の夢幻の世界をふくらませます。片や齢を重ねた頼政率いる一千余人。片や知盛を総大将とした数万騎の平家軍。宇治川の南北の岸に分かれての合戦。高倉宮の令旨を手にし、平家の勢力を挫こうと立ち上がった頼政軍。先に宇治川を渡り、その橋板を二間程剥がして待ち受けるところへ、平家軍が到着。「敵は平等院にあり」と見てとれば、我先にと橋を渡り始める。橋板が外れているのに気付かず、平家の先陣二百騎押し流されて水に溺れて流れけり。ああ、はかなかりける有様かな。

藤田先生の謡とともに、私の夢幻の世界もいよいよ広がっていきます。坂東平氏で下野の住人足利の又太郎忠綱、宇治川の急流を前に、利根川を挟んでの

秩父との合戦で得た教訓を生かし、「利根川にいか程の劣り勝りはよもあらじ、いざ渡さん」として大軍に下知し、馬筏を作り果敢に先陣を切る。そして三百余騎一騎も流されず平等院側の岸に渡り着く。この事が頼政を自害に追い込むきっかけになったのだ。終戦の年に足利近くの僻村へ疎開し、十年程そこで育った私にとっては足利は第二の故郷です。忠綱を郷土の誉れと思いたいのですが、頼政を学ぶ今は恨みの一つも言いたい気分になります。

「そこは、もう少ししっかりと」藤田先生のお声がけで、はつと私は我に返ります。時代背景や登場人物に思いを馳せることも大切ですが、お謡の勉強こそ頑張りません。何も分からない私を根気強く指導くださる先生と、傘寿の私を優しく受け入れてくださるお謡大好きなお仲間たち。このような学びの会で、歴史に触れたり大声を発したりと生き甲斐のある日々を過ごせる幸せをかみしめつつ、苦手な低音が出せるようこれからも精進していくつもりです。

横浜能楽連盟連絡先

◎事務局 倉藤

TEL〇四五・八三三・一三六